内山時江さんを悼む

愛され続ける踊り追究

高知にモダンバレエ普及

「私は死ぬまで、あたかも年齢が無いかのように踊り続けていたい」

内山時江さんは脚の手術を2回もしながら、80歳近くまで舞台に立ち続けた人だった。

内山さんに会うといつも「誰からも愛される踊りを目指したい」「ダンスをするのは常に生き生きとしていたいから」「私って絶えず新しい考えを見つけ、新しいことをせずにいられない人なのよ」と前向きな言葉を耳にしていた。この向上心こそが高知にモダンバレエの種をまき、育て、広げていった原動力だったように思う。

広島県府中市生まれ。小学6年生の頃、平櫛バレエ団（広島市）の公演を見て感動。1948年に同団の平櫛安子さんに師事しモダンバレエを始める。同団が53年に高知市に教室を開設した際、指導者として来高したのが内山さんだった。

若い女性が見知らぬ土地で指導する―。不安や苦労があったことは想像に難くないが、内山さんは負けん気の強さと努力で困難を乗り越えてきたという。ちょうどその頃、高知市内でクラシックバレエの教室が人気を集めていたことも、内山さんの対抗心に火をつけたようだった。

60年に平櫛時江モダンバレエ研究所として独立。さらに73年には内山時江モダンバレエ研究所として完全に独り立ちをする。

この間、内山さんはモダンバレエの指導普及とともに、ダンサーとしての技量を磨くため71年から1年、米国ニューヨークへ。モダンバレエの第一人者、マーサ・グラハムに師事する。帰国後は県内で作品を発表すると同時に、73年から99年まで東京公演を続け、評論家の批評を受けながら作品の質を高めた。

努力を重ねる中、94年に長岡郡本山町出身の作家、大原富枝原作の作品「婉という女」で文化庁芸術祭賞を受賞した。内山さんは「自分なりにコツコツやってきたことが認められた。私の舞踊人生に光を与えてくれた」と、自作自演の作品が高い評価を受けたことが励みになったと語っていた。

それからの内山さんは米国留学中に体験し感動したダンスシアター公演に力を入れる。小さな会場での最小限の道具と装置による公演で、観客と舞踊家が一対になる体験ができるのが特徴。香美市出身の現代美術家、故高崎元尚さんは「新しい踊りを創造するエネルギーを感じる」と同公演の美術をずっと担当した。

2006年からダンスシアターで上演したのは「ア・ナ・タ」シリーズ。前年に亡くなったご主人への思いを作品に重ねたもの。15年の作品は「なぜ舞踊家はつかの間に終わる舞台のために汗を流し続けるのだろうか。二度と同じものが生まれない。世界に一つの芸術だから」と語っているかのようで、内山さんが舞台に立った最後となった。

内山さんの下から巣立った舞踊家は指導者として県内外で活躍している人が少なくない。また、内山さんはよさこい鳴子踊りに激しいロック調の音楽を取り入れた人でもあった。

19年の内山時江モダンバレエ発表会。客席には入院先から駆けつけ、研究生たちの舞台を見守る内山さんの姿があった。そのまなざしは温かさと同時に、自分もまたあの舞台に立ちたいという強い思いも感じられた。

（池添　正）

◇　◇

内山時江さんは8月7日死去、85歳。内山時江モダンバレエダンス研究所（高知市永国寺町）は12月21日に閉鎖される。

文化庁芸術祭賞を受賞した作品「婉という女」を踊る内山時江さん
（1994年10月、東京港区の草月ホール）